

## INTERVIEW

ベンチャーキャピタリストが語る「ベンチャービジネスと技術」

# 変化が絶えない世界でも 技術があれば順応できる

日本のベンチャー企業の技術力に対して、投資家サイドは実際にどう評価しているのだろうか。これまでにリムネットやインフォテリア、DeNAなどのベンチャー企業を創業時からサポートしてきたという日本テクノロジーベンチャーパートナーズ代表の村口和孝氏に聞いた。

取材/文：編集部

## 村口 和孝 (むらぐち・かずたか)

日本テクノロジーベンチャーパートナーズ  
ベンチャーキャピタリスト

1958年生まれ。慶応義塾大学経済学部を卒業後、証券系VCに入社。1998年7月に株式会社日本テクノロジーベンチャーパートナーズを設立(100%自己資金)、同年11月に日本初の投資事業有限責任組合を設立登記、VC投資を開始。 [www.ntvp.com](http://www.ntvp.com)



### ▶ 高い技術力を有する日本ベンチャー

日本テクノロジーベンチャーパートナーズでは現在までに15社に投資を行っています。半分の企業は創業から携わっています。

私が投資を行うときに重視するポイントは3つあります。まずは技術力。たとえ日本市場の中では平凡に見えても世界市場では輝きを放つことができる秀でた技術力です。2つ目に、私は「大和魂」と呼んでいます。そんな卓越した経営パワーを持った経営陣。そして3つ目は、中長期的にマーケットの成長が期待できる事業領域であることです。

海外に足を運んで私が強く感じることは、日本の技術力は海外からも恐れられているということです。特に携帯電話などの情報家電分野では、明らかに日本がリードしています。このよう

にポテンシャルは高いにもかかわらず、ベンチャービジネスについての本物の専門知識を持っている人がほとんどいないのが日本の大きな問題です。

### ▶ 技術を軸にした「しなやかさ」が必要

たとえば、私がイチレイヨンという会社の創業時に2億円のキャッシュを投資する際に発行した株券は、ここにあるカラーレーザープリンターで印刷したものです。そこに代表印を捺して、無担保・無保証・金利なし・返済不要という条件で出資したわけです。これは一例に過ぎませんが、株券の発行ひとつにしても正しく理解している人はほとんどいないのが日本の実情なんですよ。でも、シリコンバレーではこれくらいのことは誰もが知っています。だからシリコンバレーでは多くの起業家がベンチャーキャピタルを頼って殺到するのです。日本人

の多くは、シリコンバレーのベンチャーキャピタルにはベンチャーの目利きがたくさんいると思っているようですが、実際には未来が予測できる目利きなんていませんよ。シリコンバレーですら失敗を重ねながら走り続けているのです。ですから私は、日本人にも自信を取り戻してほしいと思っています。

世の中がどんどん変わることには恐怖を感じる必要はありません。変化があるからチャンスが生まれるのです。ビジネスモデルも絶えず組み替えていかなければならないし、マーケットの様相も絶えず競争条件を変化させています。しかし、それを追い続けることでしかベンチャーは生き残れないし、そこでいち早く順応できるからこそベンチャーなんですよ。常に変化し続けるこのような世の中でも、確かな技術というのはしなやかに形を変えながら生き延びていくものです。